

打ち上げ Tear Drops

ゆーきち

「沙羅先輩、今度の夏祭り、一緒に回りませんか？」

俺は勇気を振り絞って松葉先輩に誘いをかけた。練習終わりに汗を拭き、ヘアゴムを解きながら、女子バスケットボール部のエースは顔を上げた。

大学バスケット期待の超新星、松葉沙羅。無名高校出身の彼女が、今やプロ顔負けのバスケットボーラーだ。

「いいよ、誰が来るの？」

返答に少し距離を感じるが、これは想定内。この誘いに無策で挑むほど、俺は愚かではない。

「奈緒ちゃんと巧が来ます。四人で回しましょうよー、花火とかー屋台とかー」

「花火は回るもんじゃないでしょ。オッケー、集合場所とか決まったら連絡して」

沙羅先輩は手早く荷物をまとめると、体育館を後にした。

俺はスマホを取り出し、友人にメッセージを送る。

『作戦成功。根回しご苦労』

数分と待たずに、既読と返信が届く。

『いいってことよ。俺も奈緒と行けて楽しみだからな』  
メッセージは続く。

『後はお前次第だぞ』

分かってるさ。ここからは俺が踏み出せるか、だ。

俺は大学で男子バスケット部に所属している。高校時代もそれなりの成績を残していたが、大学に入学してから俺は雷に打たれたような衝撃を受けることになる。

松葉沙羅との出会いだ。彼女の天才的なプレーに、嫉妬を抱くこともできず、憧れすら置いていかれた。

これほどの高いバスケットスキルを持つていながら、高校バスケット界ではほとんど名前が上がる事がなかった。聞けば、高校ではバスケットをしていなかったという。

謎めいた経歴、高い技術、整った容姿。最後のはおまけだが、俺は密かに彼女に魅力を感じていた。

大学生の夏は、あつという間だ。

勉強に部活、バイトとやることはいつだって盛りだくさん。大学生よりも忙しいはず社会人のOBOGが平日

に部活に顔を出すのはどういうことだ。

それはさておき、今日は待ちに待った夏祭りだ。今日という今日は部活も早めの切り上げとなり、俺たちは集合場所へと急いだ。

「奈緒ちゃんは浴衣着てくるって？」

「おう、楽しみだ。そっちはどうだ？」

「沙羅先輩の破壊力は未知数だ。心移りしないように気をつけるんだな」

言いつつ、俺も心臓の高鳴りを止めることができない

い。沙羅先輩のプライベートな姿は、今思えばあまり見たことがなかった。

「お待たせー」

二人でソワソワしていると、浴衣を着た女性二人組が現れた。片方はひまわり模様をあしらった奈緒ちゃん。ひまわり模様が彼女の快活さを表現している。憎らしいことに、巧と付き合っている。

「綺麗、っすね……」

どうにか絞り出した第一声がそれだった。

黒地に花柄を散りばめた付まいは、まるで夜桜のようだ。滅多に見ることのできない沙羅先輩の浴衣姿は、花火が上がる前なのに胸を打つものがあつた。

四人で屋台を回りつつ、インカレ予選や進路のことを話した。表向きは。

「そろそろ頃合いじゃないか？」

「いや、まだ機を待て」

耳打ちしてくる巧にチヨコバナナを頬張りながら答える。花火が打ち上がるのは二十時から。まだ時間がある。予定では打ち上がる直前に巧と奈緒ちゃんにはフェードアウトしてもらおうことになっていた。

「巧くん、射的やってかない？」

「おう、任せとけ！」

……はしゃぎおって。

十九時五十分。頃合いだ。

「じゃ、俺たちは二人で花火見るから、また後でな」

ナイスだ巧。アシスト力はバスケットに限った話ではないな。

「二人とも楽しんでねー」

奈緒ちゃんを連れて、巧は人混みの中へ消えていった。残された俺たちは、お互いに笑い合った。

「二人きりになっちゃったね」

「そうっすね」

可笑しそうに笑う沙羅先輩には、俺の思惑など知る由もない。ゲームでは覚かってくらい心を読んでくるのに。

俺たちは人混みを避けて河川敷まで移動した。この日のために、混まない花火鑑賞スポットはリサーチ済みだ。花火が打ち上がるまでに、俺たちはお互いのバスケットキャリアについて話していた。

「沙羅先輩は、高校時代にはバスケットじゃなかったんすか？」

沙羅先輩は、少し影のある表情を見せたが、答えてくれた。

「色々あつてね、バスケットから離れてたんだ。少し、一人になりたくてね」

沙羅先輩の言葉には含みがあつた。バスケットからではな

く、バスケ部から離れたかった。このことから、大体のことは推して知るべしだろう。

「じゃあ、一人で技術を磨いたんですか？」

これほどの高い技術。ずっと一人で練習していたとは考えられない。

「バスケは好きだったからね。だけど、それだけじゃないよ。私を救ってくれた人がいたんだ」

瞬間、空中で火花が華開いた。空を眺める沙羅先輩は、打ち上がる華たちよりも遠くを見つめているようだった。

「綺麗っすね」

「うん」

俺たちは黙った。華やかな火花を眺めているのに、俺の心はざわついていて。何をためらっている？ 最初からこのために準備していたんだろう。

俺はようやく、思いの丈を口にした。

「沙羅先輩、俺と付き合ってくれませんか」

悩んだ末に選んだ選択は、駆け引きも何もない、ストレートな言葉だった。

一対一で勝ったことはないが、この勝負だけは……。

「ごめんなさい。あなたとは付き合えません」

あまりに単純で、無慈悲な言葉。俺の恋は瞬く間に終焉を迎えた。

「いいんです、この気持ちを伝えられただけで」

嘘をついた。こうでも言わないと、自分のカッコ悪さに耐えられなかった。

空の華やかさとは対照的に、水鏡に映るのはまるで零れ落ちた涙のようだ。

その後のことは、よく覚えていない。気まずい雰囲気のまま、家に帰って寝た気がする。

暑い。だるい。起きたくない。そうか、俺は振られたんだ。堪え難い消失感が襲ってくる。今日は、学校も部活も休んじまおうかな……。

やっとの思いで家を出た頃には、すでに部活動開始の時間になっていた。結局、今日の講義はサボってしまった。

蝉の声でさえ、あまりに自信ありげで忌々しい。陽炎に溶けてしまいうるさくになりながらどうにか学校までたどり着いた。

部室の扉を開く。

「よう！ どうした、浮かない顔して？」

お前、この顔を見て昨日のことを察することができないのか？ 無神経すぎるぞ。

「ほっといてくれよ、今は一人になりたいんだ」

「そりゃねーだろー。今回の作戦に俺も加担してるんだからよー」

ぐ、そういえばこいつには貸しがあるんだって。

「ハア、分かったよ。借りは返す。槐屋でいいか？」

槐屋は駅を跨ぐが、話題の菓子屋だ。二人分も奢ってやれば、彼女との話題も咲こう。

「おいおい、そういうのは作戦が終わってからだろう？ま、結果如何によつては奢ってやるよ」

「ハア？ 何言ってるんだ？」

要領を得ない会話をしているうちに、部活動を開始時間となった。バスケット向き合っているうちは、ざらついた気持ちを追い出すことができた。

部活動が終了し、キャプテンからの連絡を受ける。夏の合宿のこと、夏の練習試合の日程のこと、昨日の練習で話したことと一語一句変わらない。

「最後に、夏祭りだからって浮かれすぎないこと。では今日は解散！」

今、何て言った？ 俺は慌ててスマホを取り出し、日ちを確認した。八月八日……昨日がまた繰り返している!!

もう一度、沙羅先輩と花火を見に行ける……？

昨日と同じように四人で夏祭りの屋台を回った。いや、昨日のことなんだけど、今日起こっている。俺にとつては。

「巧くん、射的やっつかない？」

「おう、任せとけ！」

……もう何も言うまい。

二人きりで、花火を見ていた。

俺はまだ、告白していない。昨日の今日のこと、踏ん切りをつけられずにいた。

「橋さ、なんで私を花火大会に誘ってくれたの？」

先に口を開いたのは沙羅先輩だった。

「それは、沙羅先輩と花火見たいからに決まってるじゃないっすか」

「そんな人、初めてだよ」

過去に、沙羅先輩に何があつたのかは、俺は知ってしまっている。どう立ち直ったかまで。救ってくれた人というのは恐らく……。

それでも。

もしかしたら。今なら。今回なら。

もう一度。もう一回。

考えずにはいられなかった。

すぐに思い直す。

答えは出ているはずだ。

この夜が続いて欲しかった。

今以上の関係は、望めないから。

それでも、もう一度……

「沙羅先輩、俺……」

「つたく、お膳立てはしてやったのに、結果を出さないとほなあ。当たって碎けるんじゃないのかよ？」

「ハア!! なんだそれ嫌味か!! てかなんで碎ける前提なんだよ!」

沙羅先輩への気持ちは、そつとしまっておくことにした。少なくとも今の俺では、沙羅先輩には届かない。選手としても、男としても。

「俺も、いつまでも立ち止まってはられないからな。さっさと前を向くさ」

夏はもうすぐ終わり、秋が近づいてくる。キャンパスライフにインターバルはない。